

近世中村城および城下町中村とその周辺における寺社配置 岩本由輝

The Arrangement of Temples and Shrines in Nakamura Castle, Nakamura Castle Town and Surrounding Areas in Early Modern

- ① 相馬氏が中村城に入るまで
- ② 妙見神祠の中村城内への遷宮
- ③ 妙見別当歡喜寺の熊野堂城跡移転
- ④ 中村および周辺への扈從寺社の配置
- ⑤ 城下町中村と寺社の配置
- ⑥ 寺社と都市空間としての景観

【論文要旨】

中村藩相馬氏にとって、一六一一（慶長一六）年に居城を鎌倉末・南北朝・室町・戦国期以来の陸奥行方郡の小高城から隣接する大藩仙台藩伊達氏との境により近い宇多郡の中村城に移したことは、戦国期を通じての伊達氏との敵対関係からいって相当の緊張をともなうものであった。それは宇多郡が南北朝期においては南朝方の結城氏の支配するところであり、戦国期においては一五四二（天文一一）年の伊達氏天文の乱までは伊達氏の支配するところであって、伊達氏天文の乱の終熄後、ようやく宇多郡の南半に実効的支配を及ぼすことができたばかりのところであった。中村城内あるいはその周辺には相馬氏と敵対関係にあった領主たちがそのときに祀った寺社がいくつが存在していた。相馬氏が中村城を造営し、城下町中村を形成するにあたって、これら寺社の扱いは宗教的のみならず政治的にも大いに神経を使わなければならないことであった。

相馬氏は北斗七星を祀る妙見信仰を有し、妙見大明神を累世の鎮守としているが、これは一三三三（元享三）年、相馬氏が下総から陸奥行方郡に下向したときに持ち来ったものであり、相馬氏あるところに妙見ありといわれている。その妙見神祠を中村城移城と同時に城内西二の丸に遷座して城の押さえとするともに、城内にあった旧領主にかかわる神祠を西三の丸にまとめている。そして、翌一六一二（慶長一七）年に妙見別当をつとめる新義真言宗歡喜寺を城下の南西の外れになる熊野堂山（南北朝に結城氏麾下の拠点となる）に配して鎮護の役をになわせる。このあと、相馬氏の奥羽下向のさいに妙見の神輿に扈從した寺社を熊野堂山に連なる中村城南面の丘陵や中村城北面の小泉（北山）丘陵および城下町の要所に配する形で、城下町としての都市空間をつくりあげて行く。現代において相馬市の景勝地とされている寺社の背後に隠れているその造立の政治的意味を本稿では考察する。